岡山大学経済学会雑誌27(4),1996, 25～ 49

中国人私費留学生の留学目的及び適応

岡　益　巳
深　田　博　己[1]
周　玉　慧[2]

1．問題の所在

1．1．異文化適応

外国留学は，自文化から異文化への移行という環境移行の問題を内包しており，来日した外国人留学生は，日本という異文化環境に適応しなければならない。異文化適応とは，「個人と他の文化圏，社会あるいは国家の人たちとの間に調和のとれた満足すべき関係が保たれている状態」（周［1995ａ］）であり，また，「ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて，異なった新たな環境に次第に慣れてゆく過程」（高井［1989］）である。前者は，異文化適応を個人と異文化環境との調和的関係として定義しており，異文化適応を静的に捉える立場である。これに対して，後者は，異文化適応を個人が異文化環境に順応していく過程として定義しており，そこでは個人が環境の変化のどの側面にどの程度順応できるか，また，どのような経過をたどって達成できるのかが問題とされ，異文化適応を動的に捉える立場である。

自文化環境への適応に比べて，異文化環境への適応の方が困難度が大きい

（1）広島大学教育学部，社会心理学専攻
（2）中央研究院中山人文社会科学研究所（台湾），社会心理学専攻

ことは当然であるが，そこには量的な違いと共に質的な違いも含まれる。この点に関して，上原［1988］は，異文化環境への適応が自文化内の新環境への適応と本質的に異なると考えた。そして，彼女は，外国人留学生が異文化の中で達成しなければならない適応は重層的であり，①一個の人間の成長発達段階で通過してゆかねばならない適応，②大学生としての環境への適応，③異文化レベルでの適応，の３つのレベルがあると指摘した。

また，Bochner［1972］は，留学生が異文化における大学生活に適応していくために必要な課題として，次の４つを挙げている（山本［1986］p.11による）。①その国あるいは地方の文化様式を身につける外国人としての課題，②新入生と同じく，新しい大学に入ったときに生じるストレスに対処していく学生としての課題，③適切な目的，手段によって目標の達成をめざして成長，発達していく個人としての課題，④民族的背景や国家情勢に対して敏感な，自国文化の代表者としての課題。上原［1988］のいう異文化レベルでの適応は，Bochner［1972］の①と④の課題に対応する。

異文化適応は，異文化環境への移行時点からの時間経過に従って特徴的な変化を示すことが指摘されている。稲村［1980］は，時間経過に伴う異文化適応を，①移住期，②不満期，③諦観期，④適応期，⑤望郷期，の５期に分類している。こうした見解は，異文化適応を動的過程とみなす高井［1989］の定義と一致する。

１．２．外国人留学生の日本への適応

１．２．１．外国人留学生の適応

Baker［1981］の適応尺度に基づいて，山本［1986］は27項目の適応尺度を作成した。山本［1986］の適応尺度は，①学習・研究，②人間関係，③情緒，の３領域から構成されており，25名の外国人留学生を対象に，３回（８～10週間後，８カ月後，14カ月後）にわたって調査が実施された。その結果，人間関係領域での適応度は学習・研究領域や情緒領域での適応度より

も高いことが判明したが，時期による適応度の変化は認められなかった。

続いて，上原［1988］も，Baker［1981］の適応尺度を参考にしながら56項目の適応尺度を作成した。上原［1988］は，異文化適応には，①学習・研究，②心身健康・情緒，③言語，④対人関係，⑤文化，⑥住居・自然環境，⑦経済環境，の７つの領域があると仮定した。193名の外国人留学生の回答結果から，外国人留学生にとって日本社会への適応で最も困難な領域は，対人関係と経済環境の領域であると報告している。

外国人留学生が日本での生活に適応するうえでの障害の程度を，岩男・萩原［1988］は，①生活費，②プライバシーの欠如，③過密な人口，④日本の食事，⑤日本人とのコミュニケーション，⑥外国人に対する日本人の態度，⑦日本の習慣，⑧日本人の考え方，の８項目にわたって調査し，1,301名の留学生から回答を得た。その結果，項目⑤，⑥，⑧といった日本人との人間関係に直接かかわる要因を適応上の障害として，外国人留学生は強く認識していることが明らかとなった。

以上のように，外国人留学生の日本への適応に関する先行研究の結果は必ずしも一貫していない。特に，対人関係領域での適応に関しては，他の領域での適応に比べて，良好であるとする山本［1986］の結果と劣悪であるとする上原［1988］及び岩男・萩原［1988］の結果とが真っ向から対立する。

１．２．２．外国人留学生のストレス

外国人留学生が直面する心理的ストレスを解明するために，モイヤー［1987］は，68項目のストレス尺度を作成し，149名の外国人留学生のストレスを測定した。その結果，①多義性，②拒否，③価値観のずれ，④日本語の理解，⑤先入観に基づく扱い，⑥日常の厄介，⑦制御不可能な要因による生活不安，の７因子を抽出した。そして，モイヤー［1987］は，これらの因子別ストレスの規定因として12個の変数を取り上げ，検討している。

また，外国人留学生の生活ストレッサーを測定するために45項目の尺度を作成した姚・松原［1990］は，外国人留学生192名と日本人学生163名のデー

タから次の6因子の生活ストレッサーを抽出した。①人間関係や自分自身の問題，②病気や死亡，③勉学上の問題，④環境の違いによる問題，⑤現実生活に関する問題，⑥言葉の問題。外国人留学生の生活ストレッサーは，上記の因子でいえば，②，⑥，⑤，③，①，④の順に強いと報告されている。

さらに，275名の外国人留学生を対象にストレスと居住形態との関係を中心に調査した田中・横田［1992］は，11項目のストレスが，①異文化での対人関係，②語学とその運用，③実用的処理，の3クラスターに分類されるという結果を得た。そして，クラスター①，②，③の順にストレス評価の高い項目を多く含んでいると報告している。

このほかに，田中［1993］は，外国人留学生からの学生相談の内容をKJ法を用いて分類し，①異文化間カウンセリング，②心理相談，③健康相談，④話し相手，⑤進路相談，⑥語学，⑦学業，⑧問い合わせ・要望，の8領域が認められると述べている。

以上の先行研究が取り上げた外国人留学生のストレスあるいはストレッサーは，日本に対する彼らの異文化適応を妨げるものであり，適応と表裏一体を成すものである。すなわち，ストレスあるいはストレッサーは不適応に密接に関係しており，これを考慮することによって適応の理解が深まると期待される。

1．3．外国人留学生の留学目的

外国人留学生の適応を問題とするとき，彼らの留学目的を抜きには語れない。なぜならば，留学目的と直接関係する領域での低い達成度は，ストレスの原因となり，適応に決定的な影響を及ぼすからである。すなわち，重要な留学目的が達成されない場合，留学生は極めて大きいストレスに直面し，留学生活への不適応が生じるであろう。しかし，留学目的の達成度が低くても，それが重要でない場合には，留学生はあまりストレスを感じることはなく，留学生活への不適応が促進されることはほとんど起こりえないであろ

う。そうした意味で，重要な留学目的の達成に伴う満足感は，適応感の中核部分を形成すると考えられる。

留学目的に関して，山本［1986］は，①学習・研究，②人間関係，③情緒，の3つの領域を想定し，各領域の目的の重要度を外国人留学生に評定させた。その結果，学習・研究領域の重要度が他の2つの領域の重要度よりも高いことがわかり，3領域の重要度は来日後の時期によって変化しないことが明らかとなった。

また，岩男・萩原［1988］は，学位取得を目的として来日する留学生が圧倒的に多く，日本語の習得や日本文化の理解を副次的な目的とする留学生が多いと述べている。

1．4．中国人留学生の適応

1．4．1．中国人留学生の適応の全体的傾向

中国大陸出身の留学生（大学生と専門学校生）と就学生（日本語学校生）を対象とした調査研究の中で，岡・深田［1994］は，適応に関係する問題に関して，次のように報告している。日本での生活感情に関して，「楽しい」，「充実している」という肯定的感情をもつ者と，「孤独」，「苦痛」，「つまらない」という否定的感情をもつ者との割合を分析したところ，大学生の場合は肯定的感情をもつ者の方が58％と多いが，専門学校生の場合は否定的感情をもつ者の方が58％と多くなり，日本語学校生の場合は否定的感情をもつ者の方が75％にも達することが示された。さらに，現在最も悩んでいる問題について自由記述による回答を求めたところ，大学生では，就職・進路の問題が最も多く，専門学校生では，ビザの問題と就職・進路の問題が，日本語学校生では，勉学上の問題とビザの問題が多かった。

台湾出身の33名の留学生を対象とした周［1995b］は，来日3カ月後，9カ月後，1年9カ月後の3回にわたって，適応等の調査を行った。そして，来日9カ月後から1年9カ月後にかけて，適応度が高まることを見い出し

た。また，最近最も困った問題について尋ねたところ，留学生が最も困っていることは，時間の経過にかかわりなく，勉学上の問題が最も多く，時間の経過に伴って，人間関係の問題がやや少なくなり，情緒の問題がやや多くなることが判明した。

1．4．2．中国人私費留学生の適応

経済水準の高い国から来日した留学生や国費留学生（日本政府国費留学生と公的には私費留学生に分類される外国政府派遣留学生）に比べると，経済的困窮度の面で，中国大陸出身の私費留学生（狭義の私費留学生）は特異な存在であることを，岡・深田・周［1995］は指摘した。そして，台湾出身の留学生や国費留学生に比べて，中国大陸出身の私費留学生が必要とするソーシャル・サポート及び提供可能なソーシャル・サポートは，経済的側面に関係する人口学的変数の影響を大きく受けるであろうと予測した。分析の結果，総収入やアルバイトの必要性といった経済的側面に関係する人口学的変数の影響が顕著であることが証明され，予測は支持された。

ところで，岡他［1995］が取り上げた必要とするサポートは，適応とネガティブな関係をもつこと（Jou & Fukada［1995 a，1995 b］）や，ストレッサーの代用尺度として使用可能なこと（Jou & Fukada［1995 a］）が指摘されている。従って，中国人私費留学生の場合，経済的側面に関係する人口学的変数が適応，ストレッサー，留学目的達成感といった広義の適応に対して大きな影響を及ぼしうるかどうかを検討する必要があると考えられる。

また，外国人留学生の適応は，領域によって異なるが，その領域間の差異が先行研究（岩男・萩原［1988］；上原［1988］；山本［1986］）の間で矛盾することを指摘してきた。そこで，本研究では，中国大陸出身の私費留学生の適応度が，適応領域によってどのように異なるのかを明らかにしたい。

加えて，適応の問題と密接にかかわる留学目的の重視度と達成満足度に注目し，中国大陸出身の私費留学生の留学目的重視度及び留学目的達成満足度が留学目的の領域によってどのように異なるかを明らかにしたい。

最後に，中国大陸出身の私費留学生の適応，留学目的重視度，留学目的達成満足度と人口学的変数との関係を検討したい。

1．5．本研究の目的

本研究の目的は，中国人私費留学生を対象とし，彼らの留学目的重視度，留学目的達成満足度，適応度に関するそれぞれの領域間の差異を検討すること，及び，留学目的の重視度，達成満足度，適応度に及ぼす人口学的変数の影響を検討することである。

2．調査方法と調査内容

2．1．調査方法

2．1．1．調査対象

岡山県内の大学と短期大学に在籍する中国大陸出身の私費留学生130名を調査対象とし，86名の回答を得た。このうち，完全回答を寄せた80名を分析対象とした。

2．1．2．調査手続き

「留学生活に関する調査」と題する質問紙調査票を作成し，1991年8月から9月にかけて調査を実施した。なお，調査方法と調査手続きの詳細については，岡［1992］を参照されたい。

2．2．調査内容

2．2．1．人口学的変数

本論で取り上げる調査項目のみを記述する。本研究で説明変数として使用する人口学的変数は，対象者の①年齢，②性，③結婚・居住形態，④住居，⑤日本語能力，⑥滞在期間，⑦専攻分野，⑧在籍身分，⑨在籍大学，⑩総収入，⑪授業料減免，⑫アルバイトの必要性，の12項目である。

2．2．2．適応度

適応度の測定には，上原［1988］の適応尺度から16項目を抽出して用いた。本研究で使用した適応尺度は，勉学領域，交流領域，情緒領域，環境領域の4領域について，4項目ずつから構成された。適応尺度の具体的な項目は，表1に示した通りである。不適応状態を表すそれぞれの項目に対して，日本へ来てからそのようなことを経験したり感じたりしたことがどのくらいあるかを尋ね，「よくあてはまる」（1点），「かなりあてはまる」（2点），「少しあてはまる」（3点），「全くあてはまらない」（4点）の4段階で評定させた。高得点ほど適応度が高いことを意味する。

表1　適応尺度の内容

1．最近，勉強する気があまりしない。
2．大学での研究や勉強を続けていく能力に自信がない。
3．この大学での研究や勉強が楽しくない。
4．自分の専門分野の授業で，日本語で研究発表をしたり，討論したりすることがうまくできない。
5．大学に何でも話せる日本人学生の友人がいない。
6．何でも話せる留学生の友人がいない。
7．日本人の挨拶や礼儀が分からなくて困ることがある。
8．自分が外国人で目立つので，自分の行動が制限されるように感じる。
9．日本に来てから，感情の変化が激しい。
10．日本に来てから，寂しくなることがよくある。
11．最近，イライラしがちだ。
12．最近，憂鬱になりがちだ。
13．日本の食べ物が口に合わなくて困ることがある。
14．私の住んでいるところの治安状態はよくない。
15．現在の住まいの住みごこちは非常に快適で満足している。
16．日本の気候はとても耐え難い。

2．2．3．留学目的重視度

留学目的を，勉学領域，交流領域，文化体験領域，言語領域の4領域に分類した。そして，それぞれの目的がどのくらい重要であるかを各1項目で尋ね，「非常に重要」（4点），「かなり重要」（3点），「やや重要」（2点），「全く重要でない」（1点）の4段階で評定させた。高得点ほど重視度が高い。

表2　留学目的重視度と達成満足度の測定項目

1．研究・勉強について
　専門的知識を深めること
　研究方法や専門技術を学ぶこと
　学位を取得すること
　など
2．交流について
　いろいろな人と付き合うこと
　外国人の友人を作ること
　研究者との交流を深めること
　など
3．文化体験について
　日本の文化を体験すること
　日本に関する知識・理解を深めること
　など
4．言語について
　日本語を習得すること
　他の外国語を習得すること
　など

2．2．4．留学目的達成満足度

同様の4つの目的のそれぞれについての，現時点での達成度にどのくらい満足しているかを各1項目で尋ね，「非常に満足している」（4点），「ある程度満足している」（3点），「少し満足している」（2点），「全く満足していない」（1点）の4段階で評定させた。高得点ほど満足度が高い。

なお，適応度の総得点と領域別得点，留学目的重視度の総得点，留学目的達成満足度の総得点は，該当する項目得点の平均値を使用した。

3．分析結果

3．1．留学目的の重視度と達成満足度及び適応の実態

3．1．1．留学目的重視度の特徴

留学目的重視度の総得点，領域別得点を表3の左欄に示した。総得点は，

特別な意味はなく，強いて言えば，重視する留学目的の範囲の広さないしは留学目的の全体的な強さを表す指標であろう。重視度の領域間の差異を検討したところ，言語領域と勉学領域の方が交流領域と文化体験領域よりも重視度が高いことが判明した。

続いて，重視度の領域間の関係を検討したところ，表4の上欄に示したように，4つの領域の重視度の間にはそれぞれ有意な正の相関関係が認められた。

表3　留学目的重視度と留学目的達成満足度の総得点，領域別得点の平均と *SD*，及び領域間比較の結果

	重視度		達成満足度	
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)
総　得　点	3.47	(0.52)	2.11	(0.60)
勉学領域得点	3.65a	(0.57)	2.24a	(0.73)
交流領域得点	3.30b	(0.78)	1.89b	(0.79)
文化体験領域得点	3.21b	(0.85)	2.11a	(0.84)
言語領域得点	3.71a	(0.55)	2.19a	(0.94)

注）平均値の右肩の記号は，*t* 検定（$df=79$）による領域間比較の結果を示す。同一記号が含まれる領域間には有意差はない。異なる記号のみがある領域間には有意差（$p<.05$）が存在する。

3．1．2．留学目的達成満足度の特徴

留学目的達成満足度の総得点，領域別得点を表3の右欄に示した。満足度の領域間の差異を検討したところ，勉学領域，言語領域，文化体験領域に比べて，交流領域の満足度が最小であることが判明した。

次に，満足度の領域間の関係を検討したところ，表4の下欄に示したように，交流領域と言語領域の間の関係を除く全ての領域間にそれぞれ有意な正の相関関係が見い出された。特に，交流領域と文化体験領域の相関関係が高い点が目につく。

3．1．3．適応の特徴

表4　領域別留学目的重視度得点間の相関関係及び領域別留学目的達成満足度得点間の相関関係

【留学目的重視度】	1.	2.	3.
1．勉学領域	—	—	—
2．交流領域	.43***	—	—
3．文化体験領域	.36**	.49***	—
4．言語領域	.47***	.34**	.45***

【留学目的達成満足度】	1.	2.	3.
1．勉学領域	—	—	—
2．交流領域	.48***	—	—
3．文化体験領域	.39***	.66***	—
4．言語領域	.36**	.20	.28*

注）***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.05$

適応の総得点，領域別得点を表5に示した。適応の領域間の差異を分析したところ，勉学領域と環境領域の方が交流領域と情緒領域よりも適応度が大であることが判明した。

適応の領域間の関係を分析したところ，表6に示したように，勉学領域，交流領域，情緒領域の3領域間にそれぞれ有意な正の相関関係が見い出された。しかし，これらの3領域と環境領域との間には有意な相関関係は認められず，環境領域の適応は，他の領域の適応とは無関係であることが分かった。

表5　適応の総得点と領域別得点の平均と *SD*，及び領域間比較の結果

	M	(*SD*)
総得点	3.26	(0.39)
勉学領域	3.48a	(0.47)
交流領域	3.05b	(0.56)
情緒領域	2.89b	(0.87)
環境領域	3.61a	(0.44)

注）平均値の右肩の記号は，*t* 検定（$df=79$）による領域間比較の結果を示す。同一記号が含まれる領域間には有意差はない。異なる記号のみがある領域間には有意差（$p<.05$）が存在する。

3．1．4．留学目的達成満足度と適応との関係

留学目的達成満足度と適応との関係を分析するために，両得点間の相関関

表6　領域別適応得点間の相関関係

	1.	2.	3.
1. 勉学領域	—	—	—
2. 交流領域	.23*	—	—
3. 情緒領域	.35**	.36**	—
4. 環境領域	.07	.16	.17

注）**p<.01, *p<.05

表7　留学目的達成満足度得点と適応得点との相関関係

		留学目的達成満足度				
		総得点	勉学領域	交流領域	文化体験領域	言語領域
適応	総得点	.36**	.23*	.40***	.20	.24*
	勉学領域	.21	.19	.11	−.04	.31**
	交流領域	.28*	.13	.35**	.11	.23*
	情緒領域	.23*	.15	.27*	.16	.10
	環境領域	.27*	.14	.35**	.28*	.04

注）***p<.001, **p<.01, *p<.05

係を検討したところ，表7の結果が得られた。満足度の総得点と適応の総得点との間には有意な正の相関関係が存在し，当初の予想通り，留学目的達成満足度が適応に結びつくことが証明された。しかし，勉学領域の満足度は勉学領域の適応と有意な相関関係を示さなかった。これに対して，交流領域の満足度は，交流領域の適応のみならず，情緒領域や環境領域の適応とも有意な正の相関関係を示し，交流領域の満足度が適応に対して果たす役割の大きいことが明らかとなった。さらに，言語領域の満足度が，勉学領域と交流領域の適応と有意な正の相関関係をもつことも示され，言語領域の満足度も適応と深くかかわっていることが分かった。

3．2．留学目的重視度と人口学的変数との関係

3．2．1．留学目的重視度の総得点

留学目的重視度の総得点を基準変数とし，12個の人口学的変数を説明変数とする数量化理論Ⅰ類による分析結果を表8に示した。

表8によると，重視度の総得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，日本語能力の1変数のみであり，重相関係数は.50であった。日本語能力の上級者の方が，中級者や初級者よりも，留学目的の全般的重視度は大であった。

3．2．2．留学目的重視度の領域別得点

留学目的重視度の領域別得点を基準変数とし，12個の人口学的変数を説明変数とする数量化理論Ⅰ類による分析結果を表8に示した。

重視度の勉学領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，滞在期間の1変数のみであり，重相関係数は.48であった。来日後の滞在期間の長い者，短い者，中程度の者の順に勉学領域の重視度が大であった。

重視度の交流領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，日本語能力，在籍身分，授業料減免の3変数であり，重相関係数は.53であった。日本語能力の上級者，初級者，中級者の順に交流領域の重視度が大であった。また，正規生よりも非正規生の方が，授業料の減免のない者よりもある者の方が交流領域の重視度は大であった。

重視度の文化体験領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，結婚・居住形態，総収入の2変数であり，重相関係数は.51であった。既婚・単身者や独身者よりも既婚・同居者の方が，総収入が多い者よりも少ない者や中程度の者の方が，文化体験領域の重視度は大であった。

重視度の言語領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，日本語能力，滞在期間の2変数であり，重相関係数は.46であった。日本語能力の初級者や中級者よりも上級者の方が，滞在期間の中程度の者よりも長い者や短い者の方が，言語領域の重視度は大であった。

3．3．留学目的達成満足度と人口学的変数との関係

3．3．1．留学目的達成満足度の総得点

留学目的達成満足度の総得点を基準変数とし，12個の人口学的変数を説明変数とする数量化理論Ⅰ類による分析結果を表9に示した。

表9によると，満足度の総得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，滞在期間の1変数のみであり，重相関係数は.39であった。滞在期間の長い者や短い者よりも中程度の者の方が留学目的達成満足度は大であった。

3．3．2．留学目的達成満足度の領域別得点

留学目的達成満足度の領域別得点を基準変数とし，12個の人口学的変数を説明変数とする数量化理論Ⅰ類による分析結果を表9に示した。

満足度の勉学領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，専攻分野の1変数のみであり，重相関係数は.40であった。専攻分野が文科系の者よりも理科系の者の方が勉学領域での満足度は大であった。

満足度の交流領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，日本語能力と滞在期間の2変数であり，重相関係数は.50であった。日本語能力の上級者や中級者よりも初級者の方が，滞在期間の短い者よりも長い者の方が交流領域の満足度は大であった。

満足度の文化体験領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は皆無であり，重相関係数は.35であった。

満足度の言語領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，日本語能力と滞在期間の2変数であり，重相関係数は.61であった。日本語能力の上級者，中級者，初級者の順に言語領域の満足度が大であり，滞在期間の長い者よりも短い者や中程度の者の方が言語領域の満足度は大であった。

3．4．適応と人口学的変数との関係

3．4．1．適応の総得点

適応の総得点を基準変数とし，12個の人口学的変数を説明変数とする数量

化理論Ⅰ類による分析結果を表10に示した。

表10によると，適応の総得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，在籍身分と総収入の２変数であり，重相関係数は.48であった。正規生よりも非正規生の方が，総収入の中程度の者よりも多い者や少ない者の方が，全体的な適応度は高かった。

３．４．２．適応の領域別得点

適応の領域別得点を基準変数とし，12個の人口学的変数を説明変数とする数量化理論Ⅰ類による分析結果を表10に示した。

適応の勉学領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，日本語能力と在籍身分の２変数であり，重相関係数は.48であった。日本語能力の初級者や中級者よりも上級者の方が，正規生よりも非正規生の方が，勉学領域の適応度は高かった。

適応の交流領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，住居，滞在期間，在籍身分，総収入の４変数であり，重相関係数は.58であった。留学生寮居住者よりもアパート他の居住者の方が，滞在期間が短い者や中程度の者よりも長い者の方が，正規生よりも非正規生の方が，総収入の多い者や中程度の者よりも少ない者の方が，交流領域の適応度が高かった。

適応の情緒領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，総収入の１変数のみであり，重相関係数は.43であった。総収入の多い者，少ない者，中程度の者の順に，情緒領域の適応度が高かった。

適応の環境領域得点との偏相関係数が有意であった人口学的変数は，住居の１変数のみであり，重相関係数は.53であった。アパート他の居住者よりも留学生寮の居住者の方が環境領域の適応度は高かった。

表8　留学目的重視度の総得点及び領域別得点を基準変数とする数量化理論Ⅰ類による

説明変数	カテゴリー	N	総得点 カテゴリー数量	総得点 偏相関係数	勉学領域 カテゴリー数量	勉学領域 偏相関係数
年齢	30歳未満	42	0.04	0.08	0.11	0.20†
	30歳以上	38	−0.04		−0.12	
性	男	50	−0.02	0.04	0.03	0.07
	女	30	0.03		−0.05	
結婚・居住形態	既婚・単身	31	−0.12	0.18	−0.07	0.09
	既婚・同居	32	0.09		0.08	
	未婚(単身)	17	0.06		−0.02	
住居	留学生寮	33	0.03	0.05	−0.13	0.15
	アパート他	47	−0.02		0.09	
日本語能力	上級	43	0.17	0.33**	0.09	0.20†
	中級	30	−0.19		−0.06	
	初級	7	−0.25		−0.32	
滞在期間	18カ月以下	31	0.08	0.18	0.18	0.31**
	19〜36カ月	28	−0.12		−0.24	
	37カ月以上	21	0.04		0.05	
専攻分野	理科系	45	−0.07	0.14	−0.12	0.22†
	文科系	35	0.09		0.15	
在籍身分	正規生	58	−0.08	0.18	−0.02	0.04
	非正規生	22	0.20		0.05	
在籍大学	岡山大学	74	−0.01	0.06	0.00	0.03
	その他	6	0.10		−0.05	
総収入	40〜75千円	26	0.05	0.19	0.17	0.20†
	76〜110千円	38	0.04		−0.05	
	111千円以上	16	−0.19		−0.15	
授業料減免	減免あり	46	0.11	0.18	0.09	0.13
	減免なし	34	−0.15		−0.12	
アルバイトの必要性	生活不可能	57	−0.05	0.16	−0.06	0.17
	生活可能	23	0.13		0.15	
重相関係数 (R)				0.50†		0.48†

注) $^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$, $^{\dagger}p<.10$

分析結果

交流領域 カテゴリー数量	偏相関係数	文化体験領域 カテゴリー数量	偏相関係数	言語領域 カテゴリー数量	偏相関係数
−0.01	0.02	−0.04	0.05	0.09	0.18
0.01		0.04		−0.10	
−0.06	0.11	0.04	0.06	−0.07	0.16
0.10		−0.06		0.11	
−0.16	0.16	−0.27	0.24*	0.01	0.13
0.12		0.24		−0.09	
0.05		0.05		0.16	
0.20	0.20†	0.18	0.16	−0.12	0.15
−0.14		−0.12		0.08	
0.26	0.36**	0.18	0.23†	0.16	0.28*
−0.38		−0.15		−0.17	
0.01		−0.44		−0.24	
0.00	0.07	0.06	0.06	0.10	0.26*
−0.06		−0.00		−0.19	
0.08		−0.08		0.11	
0.02	0.03	−0.17	0.22†	0.00	0.00
−0.02		0.22		−0.00	
−0.19	0.29*	−0.06	0.08	−0.04	0.09
0.50		0.15		0.11	
−0.03	0.15	−0.02	0.07	0.01	0.06
0.39		0.20		−0.12	
−0.11	0.17	0.12	0.32**	0.04	0.09
0.13		0.15		−0.05	
−0.14		−0.56		0.06	
0.24	0.26*	0.04	0.05	0.06	0.09
−0.32		−0.06		−0.08	
−0.02	0.05	−0.10	0.20	−0.02	0.07
0.06		0.26		0.06	
	0.53*		0.51*		0.46

表9　留学目的達成満足度の総得点及び領域別得点を基準変数とする数量化理論Ⅰ類に

説明変数	カテゴリー	N	総得点 カテゴリー数量	総得点 偏相関係数	勉学領域 カテゴリー数量	勉学領域 偏相関係数
年齢	30歳未満	42	−0.09	0.15	−0.02	0.03
	30歳以上	38	0.10		0.03	
性	男	50	−0.05	0.11	−0.05	0.09
	女	30	0.09		0.09	
結婚・居住形態	既婚・単身	31	0.06	0.08	0.08	0.13
	既婚・同居	32	−0.03		−0.15	
	未婚(単身)	17	−0.05		0.15	
住居	留学生寮	33	−0.05	0.07	−0.23	0.19
	アパート他	47	0.04		0.16	
日本語能力	上級	43	0.11	0.18	0.04	0.11
	中級	30	−0.15		−0.09	
	初級	7	−0.02		0.14	
滞在期間	18カ月以下	31	−0.15	0.24*	−0.16	0.16
	19〜36カ月	28	0.19		0.10	
	37カ月以上	21	−0.04		0.10	
専攻分野	理科系	45	0.05	0.08	0.18	0.26*
	文科系	35	−0.06		−0.23	
在籍身分	正規生	58	−0.05	0.10	−0.06	0.10
	非正規生	22	0.13		0.17	
在籍大学	岡山大学	74	−0.00	0.02	0.01	0.06
	その他	6	0.04		−0.16	
総収入	40〜75千円	26	0.03	0.06	0.10	0.13
	76〜110千円	38	0.01		−0.10	
	111千円以上	16	−0.08		0.07	
授業料減免	減免あり	46	0.01	0.01	0.02	0.02
	減免なし	34	−0.01		−0.03	
アルバイトの必要性	生活不可能	57	−0.01	0.02	0.03	0.07
	生活可能	23	0.02		−0.08	
重相関係数 (R)				0.39		0.40

注）$***p<.001$, $**p<.01$, $*p<.05$, $\dagger p<.10$

よる分析結果

交流領域 カテゴリー数量	偏相関係数	文化体験領域 カテゴリー数量	偏相関係数	言語領域 カテゴリー数量	偏相関係数
−0.09	0.12	−0.06	0.07	−0.18	0.23†
0.10		0.06		0.20	
−0.13	0.23†	−0.08	0.12	0.05	0.08
0.22		0.13		−0.09	
0.07	0.06	0.16	0.16	−0.07	0.11
−0.07		−0.05		0.15	
0.00		−0.20		−0.15	
−0.04	0.04	0.08	0.08	−0.01	0.00
0.03		−0.06		0.00	
−0.04	0.26*	0.02	0.05	0.40	0.47***
−0.08		−0.05		−0.36	
0.62		0.08		−0.92	
−0.33	0.33**	−0.19	0.20	0.08	0.24*
0.28		0.21		0.17	
0.11		−0.01		−0.34	
0.08	0.12	0.00	0.00	−0.07	0.08
−0.10		−0.00		0.09	
−0.15	0.23†	−0.07	0.10	0.09	0.12
0.41		0.20		−0.23	
0.00	0.01	0.01	0.03	−0.03	0.14
−0.01		−0.08		0.42	
0.13	0.11	−0.11	0.18	0.01	0.06
−0.05		0.16		0.04	
−0.08		−0.20		−0.11	
0.11	0.12	0.05	0.05	−0.16	0.15
−0.15		−0.07		0.21	
0.04	0.09	−0.09	0.15	−0.02	0.05
−0.10		0.21		0.06	
	0.50†		0.35		0.61***

表10　適応の総得点及び領域別得点を基準変数とする数量化理論Ⅰ類による分析結果

説明変数	カテゴリー	N	総得点 カテゴリー数量	総得点 偏相関係数	勉学領域 カテゴリー数量	勉学領域 偏相関係数
年齢	30歳未満	42	−0.06	0.17	−0.01	0.03
	30歳以上	38	0.07		0.01	
性	男	50	0.03	0.10	0.01	0.03
	女	30	−0.05		−0.01	
結婚・居住形態	既婚・単身	31	0.03	0.18	0.06	0.11
	既婚・同居	32	−0.10		−0.07	
	未婚(単身)	17	0.13		0.04	
住居	留学生寮	33	−0.11	0.18	−0.09	0.13
	アパート他	47	0.08		0.06	
日本語能力	上級	43	0.07	0.17	0.18	0.38**
	中級	30	−0.09		−0.20	
	初級	7	−0.03		−0.25	
滞在期間	18カ月以下	31	−0.05	0.12	0.01	0.09
	19〜36カ月	28	0.00		−0.05	
	37カ月以上	21	0.07		0.06	
専攻分野	理科系	45	0.03	0.08	0.04	0.10
	文科系	35	−0.03		−0.06	
在籍身分	正規生	58	−0.11	0.30*	−0.10	0.24*
	非正規生	22	0.28		0.25	
在籍大学	岡山大学	74	0.00	0.02	−0.01	0.05
	その他	6	−0.03		0.08	
総収入	40〜75千円	26	0.13	0.32**	0.09	0.14
	76〜110千円	38	−0.14		−0.06	
	111千円以上	16	0.11		0.00	
授業料減免	減免あり	46	0.06	0.13	0.06	0.10
	減免なし	34	−0.08		−0.08	
アルバイトの必要性	生活不可能	57	0.03	0.12	0.05	0.19
	生活可能	23	−0.08		−0.13	
重相関係数 (R)				0.48†		0.48†

注）$^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$, $^{\dagger}p<.10$

交流領域 カテゴリー数量	偏相関係数	情緒領域 カテゴリー数量	偏相関係数	環境領域 カテゴリー数量	偏相関係数
−0.05	0.11	−0.16	0.20	−0.01	0.03
0.06		0.18		0.01	
0.02	0.05	0.06	0.08	0.03	0.10
−0.03		−0.09		−0.06	
0.01	0.16	0.10	0.14	−0.06	0.16
−0.09		−0.20		−0.02	
0.16		0.19		0.14	
−0.23	0.28*	−0.34	0.23†	0.21	0.39**
0.16		0.24		−0.15	
0.03	0.09	0.03	0.05	0.02	0.16
−0.05		−0.03		−0.07	
0.07		−0.10		0.17	
−0.20	0.30*	0.07	0.07	−0.08	0.16
0.06		−0.08		0.07	
0.21		0.01		0.02	
0.05	0.11	−0.03	0.03	0.04	0.12
−0.06		0.04		−0.06	
−0.15	0.30*	−0.11	0.14	−0.08	0.23†
0.39		0.28		0.22	
−0.01	0.04	0.02	0.09	0.00	0.01
0.06		−0.26		−0.02	
0.28	0.36**	0.16	0.32**	0.00	0.07
−0.16		−0.30		−0.02	
−0.06		0.44		0.05	
0.03	0.06	0.10	0.09	0.06	0.11
−0.05		−0.13		−0.08	
0.02	0.08	0.06	0.10	−0.01	0.05
−0.06		−0.14		0.03	
	0.58**		0.43		0.53*

4．考　　察

4．1．留学目的重視度，留学目的達成満足度及び適応の特徴

中国人私費留学生が重視する留学目的の領域は，勉学領域と言語領域であることが判明した。この結果は，外国人留学生一般を対象とした岩男・萩原［1988］や山本［1986］の研究結果と非常によく一致している。

また，中国人私費留学生の留学目的達成満足度は，他の領域に比べて交流領域で最も低いことが明らかとなった。さらに，中国人私費留学生の適応度は，勉学領域と環境領域の方が交流領域と情緒領域よりも優れていることが分かった。こうした留学目的達成満足度と適応度に関して得られた結果は，外国人留学生一般を対象とした岩男・萩原［1988］，田中・横田［1992］，上原［1988］らの研究結果と極めてよく一致しており，山本［1986］の研究結果と対立する。

なお，留学目的達成満足度と適応との間には全体として正の相関関係が認められ，当初の予想通り，両者が積極的に関係していることが証明された。ただし，相関関係の大きさはあまり大きいものではなかった。

4．2．留学目的重視度，留学目的達成満足度及び適応に及ぼす人口学的変数の影響

中国人私費留学生の留学目的重視度に対して有意な関係を示した人口学的変数は6変数見られるが，このうちの5変数は部分的なかかわりを示すにすぎなかった。最も顕著な影響を及ぼすのは日本語能力であり，日本語能力の上級者ほど，全体，勉学領域，言語領域の目的をより重視していることが明らかとなった。経済的側面に関係する人口学的変数としては，総収入と授業料減免が部分的な影響を及ぼしており，総収入の少ない者の方が文化体験領域の目的をより重視し，授業料の減免を受けている者の方が交流領域の目的を重視していることが示されたが，これらの結果に関しては適切な解釈が難

しい。

留学目的達成満足度に対して有意な関係を示した人口学的変数は3変数しかみられない。最も顕著な影響を及ぼすのは来日後の滞在期間であり，滞在期間が中程度の者の方が，全体，交流領域，言語領域で満足度は大きいという点で共通しているが，逆に満足度が最も小さいのは，交流領域では滞在期間の短い者であり，言語領域では逆に長い者であるという領域による違いがみられる。

中国人私費留学生の適応に対して有意な関係を示した人口学的変数は5変数である。これらの変数の中で，総収入と在籍身分の影響が最も顕著であり，次いで住居の影響が目につく。総収入の中程度の者の全体的適応度が最も低く，総収入の少ない者の方が交流領域での適応度が高く，総収入の多い者の方が情緒領域での適応度が高い，という領域による矛盾が存在する。住居変数の場合も同様に，アパート居住者の方が交流領域での適応度は高いが，環境領域での適応度は低い，という領域による矛盾が存在する。こうした矛盾に関する適切な解釈は難しい。在籍身分の影響は一貫しており，非正規生の方が正規生よりも，全体，勉学領域，交流領域での適応度が高い。これは，研究生等の非正規生の方が学位論文や単位取得といった勉学上の義務や制約が少ないので，気楽な留学生活を送ることができることが原因であるかもしれない。なお，日本語能力の上級者ほど勉学領域での適用度が高く，滞在期間が長い者ほど交流領域での適応度が高い，という結果が唯一解釈可能な結果であると考えられる。

4．3．まとめ

中国人私費留学生は，交流や文化体験よりも勉学や言語習得を留学目的として重視している。留学目的達成に伴う満足感は交流面で最も低く，適応感も，勉学面や環境面に比べて，交流面や情緒面で低くなっている。留学目的達成満足度と適応度との間には，それほど強くはないが正の相関関係が存在

することが確認された。

中国人私費留学生の留学目的に関しては，日本語能力との関係が顕著であり，日本語能力の優れている者ほど，勉学や言語の領域を重視している。また，留学目的達成満足度に対しては，来日後の滞在期間の影響が大きく，適応に対しては，総収入と住居の影響が大きいが，これらの変数の影響の方向性は，留学目的達成度あるいは適応の領域によって異なり，解釈が困難であった。適応に対する在籍身分の影響も顕著であり，非正規生の方が全体，勉学面，交流面での適応度はより良好である。

【引用文献】

Baker, R. W. 〔1981〕 Freshmen Transition Questionaire. Unpublished manual. Clark University.

稲村博［1980］『日本人の海外不適応』（NHK ブックス377）日本放送出版協会

岩男寿美子・萩原滋［1988］『日本で学ぶ留学生――社会心理学的分析――』頸草書房

周玉慧［1995 a］「異文化適応」小川一夫（監修）『改訂新版社会心理学用語辞典』北大路書房 Pp. 12-13.

周玉慧［1995 b］「受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討――在日中国系留学生を対象として――」『心理学研究』66，33-40.

Jou, Y. H. & Fukada, H. 〔1995a〕 Effects of soial support on adjustment of Chinese students in Japan. *Journal of Social Psychology*, 135, 39-47.

Jou, Y. H. & Fukada, H. 〔1995b〕 Effect of social support from various sources on the adjustment of Chinese students in Japan. *Journal of Social Psychology*, 135, 305-311.

モイヤー康子［1987］「心理的ストレスの要因と対処の仕方――在日留学生の場合――」『異文化間教育』1，81-97.

岡益巳［1992］「中国人私費留学生に関する実態調査――岡山県の場合――」岡山大学産業経営研究会（編）『研究報告書』27，1-26.

岡益巳・深田博己［1994］「中国人留学生と就学生の意識」『岡山大学経済学会雑誌』26，1，1-28.

岡益巳・深田博己・周玉慧［1995］「中国人私費留学生のソーシャル・サポート」『岡山大学経済学会雑誌』27，3，29-59.

高井次郎［1989］「在日外国人留学生の適応研究の総括」『名古屋大学教育学部紀要』（教育心理学）36，139-147.

田中共子［1993］「「留学生」相談の領域」『学生相談研究』14，73-82.

田中共子・横田雅弘［1992］「在日留学生の居住形態とストレス」『学生相談研究』13，51-59.
上原麻子［1988］「留学生の異文化適応」広島大学教育学部（編）『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』広島大学教育学部，Pp.111-124.
山本多喜司［1986］『異文化環境への適応に関する環境心理学的研究』昭和60年度科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書
姚霞玲・松原達哉［1990］「留学生のストレスに関する研究(1)――生活ストレッサーを中心に――」『学生相談研究』11，1-11.